

「大学体育スポーツ学研究（第21巻）」優秀論文賞 選考経過および講評

I. 選考経過

1. 選考対象となる論文

2024年3月公開の「大学体育スポーツ学研究（第21巻）」に掲載された論文14編のうち、寄稿論文1編を除く13編（総説1編，原著2編，研究ノート10編）を選考対象とした。

2. 選考委員（敬称略）

第1次選考委員：西田順一，難波秀行，園部豊，梶田和宏，佐藤和，霜鳥駿太，高田大輔，田原亮二，中田征克，西垣景太，平工志穂，藤野和樹，山本浩二（以上，本誌編集委員）。

なお，著者（筆頭または共著）として論文掲載のある本誌編集委員（木内敦詞，小林雄志）については，第1次選考委員から除外した。

第2次選考委員：木内敦詞（委員長），西田順一（幹事），難波秀行（幹事），園部豊（幹事），蔵満保幸（北海道支部長），諏訪部和也（前年受賞者），富岡徹（東海支部長），藤田恵理（前年受賞者）

3. 選考結果

第1次選考では，本誌編集委員によって優秀論文賞に相応しい2編の推薦がなされた。選考委員は優秀論文賞として相応しい上位2編を推薦することとした。その結果，推薦による得点（1位を2点，2位を1点）の上位2編を第2次選考の対象とした。第2次選考では選考委員が2編に対して，大学体育への応用可能性と研究の妥当性・信頼性の観点から，量的・質的評定を行った。その結果に基づき，最終的に以下1編を優秀論文賞の受賞論文として，本連合常務理事会へ上申し，承認された。

受賞論文

大学体育授業における e-Learning を活用した身体活動増進プログラムの効果

著者：鈴木久雄ほか17名

掲載：大学体育スポーツ学研究，21：41-50，2024年3月

II. 講評

身体活動不足は健康上のリスクを高めることは誰もが知る一方で、健康づくりのための身体活動基準に満たない者の増加は、世界中で増加の一途を辿っている。本研究は、筆頭著者所属大学の体育授業における e-Learning を活用した身体活動増進プログラム (e-PAPP) が身体活動の強度や種類に及ぼす影響を、短期的および長期的な視点から検討したものである。対象は、体育授業の履修を許可されかつ研究協力の意思を示した介入群と、履修許可されなかったものの研究協力の意思を示した統制群であった。介入群は、週1回120分間のスポーツ実技とともに、授業外では学生が各自で e-PAPP の身体活動基準に沿った行動計画を立て、身体活動・スポーツ、レジスタンストレーニング (RT)、静的ストレッチング (SS) を実践している。介入群と統制群の双方を対象に、中高強度身体活動 (MVPA) を加速度計によって測定し、RT および SS の実施量を質問紙調査している。介入期間は2018年10~11月の7週間であり、調査測定を介入前、介入後、介入1年後に行っている。

介入前の身体特性や身体活動量において介入群と統制群の有意な差異は認められなかったが、介入群の MVPA は介入後、統制群の1.49倍に増加し、介入1年後も1.29倍と高値を維持していたことを示している。受講期間の変化にとどまらず介入1年後のフォローアップ測定まで行い介入効果の持続を示したことは、学術的にも実践的にも価値ある取組と結果であると評価できる。教育現場における実践研究として、最大限に信頼性と妥当性を担保するよう研究デザインやデータ分析が工夫されている点も評価できる。

本研究の e-Learning による身体活動増進プログラムの介入が終了1年後も効果が持続されたこと理由として、この e-Learning の教材では図表やイラストを多く使った実践に役立つ具体的な解説が多いことが受講生の理解度を高め、身体活動増進に寄与したことを、著者は指摘している。他にも、本プログラムは理論解説、小テスト、記録ノートなどを組み合わせ、学習者のモチベーション維持に貢献したと考えられる。RT や SS については介入1年後には実施頻度が低下するという課題は残るものの、本研究は大学体育の実践に寄与する学術的価値の高い論文であると認められる。以上より、本誌第21巻における優秀論文賞に相応しい論文であると判断した。

以 上